

エネルギー新時代へ挑戦

電気新聞は11月17日、創刊110周年記念フォーラム「エネルギー新時代へ変化に挑む」を東京・大手町の経団連会館で開催した。経営者や有識者の3氏が講演やトークセッションを行い、電力・エネルギー業界の変革期を展望。約350人が講演に耳を傾けた。同日夕には記念レセプション「感謝の集い」も開催した。本特集では創刊110周年を記念したフォーラムとレセプションの様子を振り返る。

あいさつ



あいさつする梅村部長

変化見つめ情報発信

創刊110周年、決意新たに

フォーラムの冒頭、主催者を代ぐと決意を述べた。講演では、東京電力フュエル＆パワー(F&P)と中部電力の火力合弁事業会社であるJER A社長の垣見祐二氏、エッセイスト作家の神津カナナ氏、テラモーターズ兼テラドローン社長の徳重徹氏を交わした。

講演後は、神津氏をコーディネーターとして、3氏によるトークセッションが行われた。日本企業の国際化に必要な経営のスピリットや経営者の資質、日本の風土や民族性などについて意見を交わした。

電気新聞は1907(明治40)年11月3日、「電気新報」として創刊。その後、電気関係各紙の統合を経て、現在の電気新聞となった。

社長の徳重徹氏の3氏が登壇した。

あいさつする福田会長と勝野会長



レセプション「感謝の集い」

確かな羅針盤に 関係者500人懇親

フォーラムに続き、同日夕には約500人の関係者を招待したレセプション「感謝の集い」を開催した。電力会社からは現役の会長、社長をはじめ経営幹部が多数出席。メーカーや電気工事会社、新電力などからもトップ層が顔をそろえた。本紙と電気事業の歴史を重ね合わせつつ、来し方行く末を語り合う姿が見られた。

主催者を代表して謝辞を述べた日本電気協会の福田督会長(中国電力相談役)は、「電力システム改革の進展などに触れながら、「変化の激しい時代だが、いつの時代も読者に本質を見極める確かな視点を提供できるように、真のクオリティパーパーを指していく」と決意を語った。

続いて、来賓として電気事業連合会の勝野哲会長(中部電力社長)が登壇。本紙の役割に触れ、「専門的な見地の下、一貫して正確かつ公正な報道を貫き、我々事業者が進むべき方向を指し示す『確かな羅針盤』として、電気事業の健全な発展に貢献している」と述べた。

その後、日本電機工業会(JEM A)の志賀重範会長(東芝会長)が乾杯の音頭を取り、懇談に移った。

作家・エッセイスト 神津 カナナ氏



新しい器に“血肉”を

昨年9月から1年間にわたり、電気新聞で小説を書いた。木曾川の大規模水力発電を開発した福沢諭吉の娘婿・福沢桃介を中心とした日本の近代化が始まる部分のダイナミズムを描きたいと思った。福沢桃介は明治元年生まれ。明治維新後に産声を上げた「新世代人」だ。維新で様々なものがドラスチックに変化した。人々の暮らしや意識などの「器」はすぐに変化するわけではない。幕末維新の頃に生まれた桃介のような人たちが成長したとき、出来上がった器の中に血肉を注ぎ込むことで、本当の日本がようやく動き出したのだとあらためて気付かされた。

小説描き変革直視

日本は昔から「資源のない国」。私自身、2度のオイルショックを経験し、そこで気付かされたが、その前から日本は資源のない国だったとしみじみ感じた。その中で先人たちが苦勞しながら、どのように資源を確保しようとしてきたかをきちんと見ないといけない。

また、時代は驚くほどの早さで変化する。例えば、発電所、女性の立場など。同時に変わらないこともあるが、100年にも満たない中でドラスチックに物事が変化することも見ないといけない。

この変革の時代、新しいことをしなげればいけないときに、そこに本当に血肉が入っているかを検証することが必要。本格的に動かすのはその後だ。

創業者の開拓精神、胸に

ディングに踏み出したが、電気事業者が苦手な分野。少量でも実績をつくるのが大切だ。ゼロからつくり上げるのが難しければ、実績あるパートナーと組むのも良い」と考えを示した。

また、神津氏は変化の激しい時代には経営者のスピード感も重要になると問題提起した。徳重氏は「黎明(れいめい)期の市場はスピードが全て。顧客を獲得しながら問題を改善し、P D C Aを回すことが大事」と強調。垣見氏は創業者の精神が変化の激しい時代を生き抜くヒントになるとし、「危機的状況になれば、創業者ならどうするかを巡らせる。発電所を建設する電気事業者には開発者の精神がある。J E R Aもその精神を受け継ぎ、世界を目指したい」と決意を語った。

テラモーターズ兼テラドローン社長 徳重 徹氏



日本企業の信頼抜群

大学卒業後、大手企業に就職したが、29歳で退職し米国に留学した。その後、シリコンバレーで日本企業のベンチャーを立ち上げ、現地企業のアジア進出などの事業支援を経験。こうしたことを経て、6年半前にテラモーターズを立ち上げた。ここ数年は国内外を飛び回っており、日本の利点・欠点を痛感する。

日本企業は日本人だからということでは非常に高く評価され、海外でビジネスをしやす。一方、残念なことにはどの国からも日本企業は「N A T O J (No Action, Talk Only)」と言われる。日本企業は資産、ブランド、名声があるので、チャレンジすれば様々な可能性がある。

挑戦してこそ成功

日本では新しいことを始める際に、リスクをゼロにしなければ始動しない文化があり、閉そく感がある。リスクはボラティリティー(変動性)。秘めた可能性を勝手に消しているかもしれない。

日本人の信頼度は素晴らしい半面、人が良すぎる。アグレッシブさ、チャレンジ、リスクをとることが全く足りていない。日本人にこれらのバイタリティーを加えれば、世界最強のビジネスマンになれるのではないかと思う。

日本には優れた経営者、歴史家、起業家がたくさんいる。その人たちがベンチマークにして、「これだけしかできない」という思想を取り払えば、世界にインパクトを与えられるのではないかと。



トークセッションを行う(右から)垣見氏、神津氏、徳重氏

問題提起した。垣見氏も「ノウハウも人材もなく、大変なことが多い」と言及。J E R Aの燃料調達を例に、「購買からトレ

J E R A社長 垣見 祐二氏



エネ供給で世界貢献

J E R Aが2015年に設立された際、取材で「電力会社の海外進出は全く想像していなかったのでは」と質問を受けたが、実は予想していた。30年前に電気新聞80周年の懸賞論文で、電気事業の国際化を展望していたからだ。

当時、国際企業として発展していく電気事業の姿を3段階で予想した。第1は国際協力や国際貢献で余儀なくされた国際化。第2は生き残りを懸けて新市場を求め段階。第3は多国籍企業として電力メジャーズが地球大で活動する形。日本の電力・ガス市場が成熟し、需要の伸びが鈍化する中で、現状は第2段階の国際化を果たしている。多国籍企業として

“国際企業”へ脱皮

グローバル展開を目指す第3段階は、J E R Aの姿に重なる。

国内の消費に偏ったビジネスモデルから脱皮する。海外発電事業ではアジアや中東、北米を重点地域に位置付け、世界各地で展開する。燃料事業ではグローバルプレーヤーとして活躍するために必要なL N G(液化天然ガス)と石炭の取引量を維持する。10月にはJ E R Aの子会社から石炭トレーディング事業の取得で合意した。世界の発電用石炭の5%程度を扱うグローバルトレーダーになる。

J E R Aは日本をマザーマーケットとして、世界に競争力のあるエネルギーを供給し、日本や世界の豊かな暮らしと産業経済の活力向上に貢献する。

「変化」「グローバル」「挑戦」—— 3氏がトークセッション

経営のスピード感、ますます重要

トークセッションでは「変化」「グローバル」「挑戦」といったキーワードを軸に、3氏が意見を交わした。

徳重氏は変化や挑戦について、ベンチャー企業の得意分野としながらも、「大企業にも求められる要素だ」と指摘。国内市場が小さい韓国や台湾の企業が積極的に国外展開している例を挙げ、同じ課題を抱える日本にもグローバル戦略が必須との考えを示した。米G E (ゼネラル・エレクトリック)の幹部がベンチャー企業をライバルとしていることも紹介し、事業ポートフォリオの迅速な組み換えなど、「変化を敏感に捉える感覚が必要」と強調した。

神津氏は「ドメスティックな設備産業がグローバル企業を目指すのは大変では」と